

NEWSLETTER No.93 ISSN 1340-5578  
TŌYŌ ONGAKU GAKKAI KAIHŌ  
The Society for Research in Asiatic Music January 31, 2015

一般社団法人 東洋音楽学会 会報 第93号

発行 一般社団法人東洋音楽学会  
事務所 〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号 TEL/FAX 03-3832-5152  
●E-mail : LEN03210@nifty.com ●ホームページ : http://tog.a.la9.jp

## 目次

新会長挨拶	1	東日本支部からのお知らせ	10
第65回大会レポート	1	第11回日中音楽比較研究国際学術会議のお知らせ	11
ICTM(国際伝統音楽学会)に関するお知らせ	8	会員異動	11
会員の受賞	9	図書・資料等の受贈	13
通常理事会・総会議決事項のお知らせ	9	新刊書籍	13
臨時理事会議決事項のお知らせ	9	新発売視聴覚資料	15
会費納入のお願いと大学院生会費割引のお知らせ	10	編集後記	15
第32回田邊尚雄賞アンケートのお願い	10	第3回定時社員総会議事録(抄)・添付書類	16

## 新会長挨拶

塚原康子

このたび発足した新理事会で会長を務めることになりました。向こう2年間、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

思い返せば、卒論発表を機に入会して以来、本学会には30年以上お世話になっています。私にとって、最初の学会発表も学会誌への論文投稿も、いずれも東洋音楽学会でした。ここで多くの先生方や研究仲間と知り合い、コメントをいただいたり励まされたりする中で目を開かれ、今までやって来たように感じています。

1936年に音楽研究の学会として我が国で最初に発足した本学会は、来年、創立80周年を迎えます。日本全体の趨勢を反映して、学会員の減少などが危惧されていますが、これまで音楽研究の新しい潮流を自ら創り出してきたこと、幅広い分野に確かな研究の足跡を残してきたことは、本学会の誇りとするところです。ユニークなこの学会を時代に即した形で元気よく存続させていくことが、私たちの使命であると考えています。

幸い、大きな課題であった一般社団法人への移行が2012年に無事終わり、前期の理事会はそれに伴う諸規程を整備して下さいました。お陰で、今後の学会運営の基盤はほぼ整っています。それぞれの時期にご尽力下さった方々に感謝申し

上げますとともに、その上に立って、これからも新旧会員が音楽上の新たな知見の共有を楽しむ「行ってワクワクする学会」をめざしたいと思ひます。どうぞ皆様の一層のご協力とご鞭撻をお願ひ申し上げます。

## 第65回大会レポート

(2014年11月22~23日 / 四天王寺大学)

第1日(11月22日)

### ◇恩頼堂文庫の展観

まさに天高く馬肥ゆる秋、古墳群など歴史的資源の多い聖徳太子ゆかりの閑静な羽曳野の会場にて、本大会に先立ち公開講演と併催された展観では、事前リクエストより22点を出陳、貴重な資料と接する好機となる。恩頼堂文庫の特色として、大原流天台声明家である宗淵に関連した資料が多いことを特筆しておく(詳細は大会プログラム6頁参照)。午前中、資料リクエスト者による非公式の解説があったそう。研究発表と異なる会場での展示であるため、観覧し損ねた人も多いであろうか。以下、展観資料一覧を簡略して掲載する。延徳元年十二月聖忌表白文章、遺跡講式、唄匿印可状草稿(宗淵写)、賀茂臨時祭絵巻、西園寺賞季琵琶伝授絵巻草案、御神

楽勘例、正月三節会臣下饗膳之図、法華経・開結経、法華経文字声韻音訓篇集《法華経音義》、叡山法華大会之私記、往生講私記(宗淵の印)、大源声明集、文化十一年十一月廿二日御再興初度賀茂臨時祭図類、文化十年三月十五日御再興初度石清水臨時祭図類、管絃銘器録、倭舞歌譜、倭舞装束調度品、踏歌節会次第、人見友元書、菅公遺愛琴考、雷氏琴考、古尺雛形及古尺図。 木岡史明

#### ◇第31回田邊尚雄賞授賞式・受賞祝賀会

公開講演会に先立ち、田邊尚雄賞の授賞式が行われた。審査委員長の野川美穂子理事より以下の経過報告および受賞理由の説明があった。平成25年1月1日から12月31日までの間に出版されたものの中から7点の候補があがり、審査委員会で慎重審議の結果、本年度の受賞は梶丸岳氏の『山歌の民族誌——歌で詞藻(ことば)を交わす』(京都:京都大学学術出版会、2013年3月)に決定した。会長より賞状・賞金が授与された。受賞理由については会報91号をご覧いただきたい。

受賞のことばを梶丸氏は次のように述べられた。あしかけ9年中国に通い研究を続けた。川田順造氏の著書に惹かれたことがこの研究の一つのきっかけとなった。人と人とのコミュニケーションへの関心から歌の掛け合い、ことばを交わす事、音楽とことばの交わりを総合的に考えたい。

過去の受賞者は長年の研究成果をまとめたどちらかといえば年長の研究者が多かったように思われるが、梶丸氏は将来の研究が大きく期待される若い研究者である。本研究は博士論文をもとに執筆された研究書である。懇親会、受賞祝賀会の席でも、今後の研究に対する抱負を述べられた。

大谷紀美子

#### ◇講演「四天王寺の聖霊会について」およびラウンドテーブル

会場校である四天王寺大学ゆかりの「聖霊会」をテーマに、公開講演会とラウンドテーブルが開催されたが、講演を予定されていた小野功龍先生が8月に急逝され、テーマは変更されなかったものの担当に変更があった。講演会の開始前に四天王寺大学の南谷美保氏からそのことについて説明があり、出席者全員で小野先生に黙とうを捧げ、ご冥福を祈った。プログラムでは、まず、小野功龍先生の「四天王寺の聖霊会について」という講演に引き続き、小野先生、南谷恵敬氏、近藤静乃氏の3人によるラウンドテーブルとなっていたが、講演は南谷(美)氏、ラウンドテーブルはご子息の小野真氏が替わりをつとめた。

南谷(美)氏からは講演ではなく、簡単な「聖霊会」についての解説を行いたいとの説明があり、表紙に声明譜が掲載された詳しい配布資料に基づいた概説が行われ、ここで聖霊

会の全体像をつかむことができた。昨年の「聖霊会」の折に作成された小冊子『四天王寺聖霊会の舞楽』も参加者に配布され、美しいカラー写真を見ながら南谷(美)氏の話聞く。聖徳太子が建立した四天王寺では、「唄・散華・梵音・錫杖」という4種の声明と作法の間に、雅楽器のみによる奏楽や舞楽を伴う「舞楽四箇法要」という形で「聖霊会」が行われてきたこと、また、平安時代、江戸時代、現在の「聖霊会」の比較から次第に簡略化されていることなどが述べられた。会員以外の一般の参加者を意識した南谷(美)氏の解説はとても丁寧だった。

ラウンドテーブルでは、四天王寺で実際に雅楽演奏にたずさわってこられた小野氏からは実際の演奏について、四天王寺「聖霊会」の最高責任者を務められる南谷恵敬氏からは声明の実際について、また、雅楽と声明のかかわりを研究されている近藤氏からは、「聖霊会」の声明と雅楽が実際にはどのように演奏されているかが発表された。南谷恵敬氏が実際に声明の旋律を例示されたが、こうした機会でもないとなかなか聴けないので興味深かった。四天王寺大学でしかできない今回の企画に参加者の一人として感謝したい。 加納マリ



#### ◇公演 四天王寺の聖霊会の声明

学び舎に秋の陽が映画のように映える四天王寺大学羽曳野キャンパス。四天王寺聖霊会に関する公開講演会は、円形の大講堂舞台中央に聖徳太子像を頂く空間で、小野功龍師への黙祷から始まった。第70回日本芸術院賞および恩賜賞を「雅亮会にて雅楽演奏継承と文化的価値を高めた功績」で受賞され、8月末に急逝された小野功龍師が渾身作として残された最新の聖霊会紹介カラー図版集ほか4点の行き届いた資料が配布され、講演は南谷美保氏が、ラウンドテーブル司会は功龍師ご子息の小野真氏が、故人の魂を現出する気迫で勤められた。四天王寺を支える声明実践者として南谷恵敬氏が、雅楽と声明両面の歴史研究をされる近藤静乃氏がラウンドテーブルに加わられた。

休憩をはさんで、「声明の実演、付物・附楽その他楽の演奏、映像による聖霊会の紹介」が南谷美保氏の進行で、四天王寺

大衆と雅亮会有志により、舞台を生かしたガラコンサートのよう  
に演じられた。講演とラウンドテーブルと実演は限られた時間  
の中に綿密な計画で配置され、密度の高い総合演出がされて  
いた。

聖霊会舞楽法要は六時堂と石舞台を含む広大な空間で毎年  
4月22日に行われる最大級の仏教行事であり、国立劇場など  
ステージで紹介される機会も数多い。その際には「舞楽」に  
焦点があてられる企画が多く、聖霊会当日には、屋外に響  
きが拡散することもあって「声明」あるいは「雅楽と声明の  
連携性」を十分味わうことが難しかった。今回の講演では響  
きのよい講堂において、全体像を俯瞰の構図で示しながら、  
味わいどころを講演やディスカッション内容から探り、実演  
においては昨年度の聖霊会の高精細な録画をカットインでは  
さみ、聖霊会の全体像が声明と雅楽の響きのイメージととも  
に市民参加者など「はじめての法会舞楽」鑑賞者にもきっち  
りと構築されたものと思う。伝統を守ることは守旧ではなく  
臨機応変対応も含む積極的な未来志向であるという趣旨で結  
ばれた小野真氏の言葉が印象に残った。 高橋美都



第2日(11月23日)

#### ◇研究発表1-A(司会:茂手木潔子)

##### 江戸中期上方歌舞伎の音楽演出

——『歌舞伎台帳集成』を手がかりに  
前島美保

江戸期の豊富な資料を活用した歌舞伎研究の進展のいっぽ  
うで、音楽演出(黒御簾音楽)については、いまだよくわか  
っていない部分が多い。前島氏の発表は、江戸中期と上方に  
時代と地域を限定して、台帳(『歌舞伎台帳集成』を参照)と  
劇書(『新撰古今役者大全』『歌舞伎事始』『増補劇場一覧』『戲  
場楽屋図会』『劇場楽屋図会拾遺』)の情報をもとに、音楽演  
出の時代的変遷を推測しようという試みであった。要領よく  
提示された用例(「寝鳥・どろどろ」「天王立」「めりやす・ぬ  
めり」「琴」「謡」「和歌」「雨・雨車」「禅の勤)が興味深く、  
発表後の質疑においても個々の用例への関心が示された。台  
帳にしても劇書にしても江戸中期の全てを網羅するものでは

なく、情報は断片である。個々の用例の実態を解明し、歌舞  
伎独自の手法が工夫されていく過程を実証するために、より  
多くの情報を、さまざまな史料から収集することが今後の課  
題となろう。今回の発表は、地域差、時代差、演目や囃子方  
との関係など、山積する課題へと向かう第一歩として、大い  
に期待を抱かせた。 野川美穂子

#### 近世邦楽の伝承から再考する「声の文化(オラリティー)」

——長唄三味線の伝統的教授法を事例研究として

佐藤岳晶

発表者は、新進の作曲家で地歌の名取りでもある。諸ジャン  
ルの職業演奏家の間で行われ得る一つの伝統的教授法にあ  
らためて接し、大きな驚きをもって着目したことが、今回の  
研究の動機になったと見受けられる。フィールドワークとそ  
の考察の経緯が、各種の資料を添えて丁寧に報告され、一  
つのドキュメントとして要領よくまとめられていた。

発表者は、オングラの理論を踏まえ、オラリティーの復権を  
注視しているのだと思われるが、現段階では、近世邦楽の現  
象をそれらの理論の枠の中でなぞらえることから脱しきれて  
いないように感じられた。とはいえ、発表者が稽古体験で得  
た「身体ごと写す」(配布レジュメ、第9コマ)という感覚は、  
音楽伝承の本質に関わる大きな収穫であったと思う。小塩さ  
とみらの先行研究を参考に、このような身体感覚のありよう  
も今後の研究の俎上に乗せ、発表者ならではの観点が開拓さ  
れることが期待される。 竹内有一

#### いわゆる『大薩摩杵屋系譜』について

蒲生郷昭

もともと歌舞伎の劇場専属として活動してきた長唄の伝承  
者・演奏者たちが、自分たちの先祖や独自の歴史を顧みる機  
運や余裕が出てきたのは案外最近のことで、明治にさしかか  
る時期のことであった。発表者は、その最も中心的な存在と  
して知られてきたこの史料の諸本とその成立事情を、先行研  
究とその背景を丹念に点検しながら、今後、この史料を学術  
的に活用するための新たな指針を提示した。

編者が、流布する諸本とどのように関わっているのか、誰  
がどのような加筆を行ったのか、諸本の異同は何を意味する  
のか。発表者によるこのような書誌的考察は、フロアでの質  
疑応答にもあらわれていたように、史料の内容的特徴とは無  
縁の些細なことのよう誤解されがちである。しかし、複数の  
写本として流布する史料については、まずはこのような細  
かな書誌的考察の積み重ねが、記述内容の真正性に関わる評  
価を大きく左右することになる。そのような音楽研究の最も  
基本的なあるべき姿を、丁寧に情報整理された配布資料とと  
もに、発表者は身を以て示してくれた。 竹内有一

◇研究発表1 - B (司会：塚原康子)

日本におけるフラメンコの受容

——ギタリスト勝田保世の活動を中心に

山村磨喜子

日本初のフラメンコ・ギタリストとなった勝田保世に注目すべきであるという発表者の主張が、いまひとつ受け止めきれなかったのが、帰宅後に配布資料と録音から発表内容の再構築を試みたがうまくいかなかった。その原因はおそらく、フロアからの質問にもあったように、勝田の活動が具体的に説明されなかったために、シンパシーを感じられぬまま終わったことにあるようだ。勝田は1937年から9年間もスペインに留学し、帰国後はフラメンコ・ギタリストとなったこと、フラメンコ・ギターの教則本を出版したこと、スペインに関するエッセイや回想録を発表したことはわかった。しかし、ギタリストとしてどこで誰のためにどんなレパートリーをどんなふうに弾いたのか、教則本がどのくらい売れて誰がどう学び、それがどの程度の影響をもったかわからない。発表は、富永浩の「保世を論じなければならない」という言葉で締めくくられたが、「なぜ？」という問いは依然として残った。

高松晃子

大正期の通信教育教材でヴァイオリンを独習する試みについて

上野正章

明治から大正期における楽器の独習について研究を続けてきた上野氏が、大正期の通信教材を用いてヴァイオリンを独習し、自ら過去の身体への復元を試みた。対面でのやりとり抜きの独習がいかに困難であるかは、発表者の自己観察記録や当日のパフォーマンスからよく伝わってきた。それはそれで興味深かったのだが、私はむしろ、教本に示された練習の手順や演奏の作法などについて述べられた部分が、発表の真骨頂だったように思う。たとえば、日本の音楽は座って弾くべし、といった作法が図版付きで紹介されているところなどは、洋楽と邦楽の区別が身体への所作にも適用されたことを示す興味深い例である。また、唱歌を用いた日本の伝統的な練習方法との類似性は、洋楽の学習において、「まるごと覚え込む」方式から「楽譜を読みながら弾く」方式への転換がいつどのように起こったのか、という大きな問いに発展させることができる。今後リアルな音楽学習の社会史を掘り下げ、新たな視点を提供してほしい。

高松晃子

名古屋における雅楽伝承の一断面——幕末から明治へ

寺内直子

寺内氏の発表は、新出の高麗屋史料(以下史料という)の紹介と、関係史料も使用しながら、史料から窺われる雅楽の上演実態について、その一部を報告するものであった。

史料は、油商、高麗屋吉田氏に伝来した、幕末以降の社会変動期における雅楽関係史料である。伝授書、楽譜(伝授奥書付き/同なしの二種)、写真、目録が含まれ、約百点であるが、演者として上演に関わった地方経済人が遺した史料であり、当時の上演実態を今日に伝えている。

史料は豊富な論点を示唆しているが、今回は、雅楽の復興機運状況や、目録史料その他から、楽人と技を習得した経済人(愛好家)が混在する演奏者の実態や、愛好家たちの地域の文化活動への関わり方などについて報告があった。

質疑応答では、経済的裏付けや奏楽の場などに関する質問がでた。それぞれ、支援に関する裏付け史料はないこと、管絃中心の月次会が愛好家宅で上演されていたことなどの応答があった。

今後これらの史料から、当時の復興に関する総合的な上演実態が明らかになることが待ち望まれる。

笠井津加佐

◇研究発表2 - A

[パネルディスカッション]

日本音楽の伝承と発展のために

パネリスト代表：大塚拜子

パネリスト：山本宏子、望月太左衛、時田アリソン

最初に大塚から、伝統的な文化の衰退を仕方がないと諦めてしまいたくない、受け継いできた文化の一つである音楽について、今後どのように伝承し発展させていくかをテーマに話し合いたい、という趣旨説明と、用語の定義がなされた後、長唄三味線方としてかかわった教育実践事例を通して、子どもたちが邦楽に触れる機会を増やす重要性和関係者のネットワークづくりが提案された。続いて山本が、教育現場での問題点を指摘、音楽研究者、演奏家、教育研究者の連携により当該文化のなかでの学びを保障する教材制作、人材確保等のあり方を提案、その後、望月から、邦楽離子方として行ってきた邦楽普及活動が紹介され、周囲の大人も引き込む活動の工夫、地方・時代を超えて音楽を捉える方向性が示された。時田は、生きている伝統の上に立つ新しい創造の重要性と、明治以降の音楽の例、日本音楽に対する国際的な評価にふれ、国際化ではなく国民化が問題である、と指摘した。

フロアからは多岐にわたる質問や意見が出され、自国の音楽に対する政策の問題、海外での日本ブランドの音楽文化の状況、教育現場におけるオーセンティシティの問題、五線譜等による指導の問題、学校での楽器調達の問題、教員勤務の多忙化、教員採用のあり方、教員養成の課題、研究者・教育現場・演奏家のずれ、事例の共有化、地域社会との連携、助成のあり方、教員への学会の支援等、パネリストを交えて熱のこもった議論が行われた。

課題は多い。が、学会でのこうした議論が新たな転換点を

生み出す行動、諸分野の連携、発信へと結びつくことを期待したい。その際、「曲を教える」指導から「日本の音の感覚を得る」という考え方への切り替えが提案された(茂手木)ように、受け継いできた音楽文化を照射するだけではなく、たとえば、音楽教育の課題であれば、子どもの人間的成長に対するまなざしでも冷静に状況を捉えるなど、学問的専門性の交差と融合によってそのアクションを支えていくことが、学会の担う今後の一つの役割ではないかと感じた。 権藤敦子

#### ◇研究発表2-B(司会:植村幸生)

##### 近現代における韓国農楽の公演芸術化

——女性農楽団の事例を中心に  
神野知恵

この発表はレジュメによれば、2014年10月に「農楽」がユネスコ無形文化遺産に登録勧告がなされたことがあり、現在の農楽伝承の現場を踏まえて、農楽の「公演芸術化」のプロセスとその歴史的背景を整理することが基盤におかれていることがわかる。1940年代の日本統治下から50年代～60年代に女性農楽団が流行したこと、またその公演農楽の特徴、および「現在進行形の公演芸術化」について述べられ、今後の農楽の課題と方向性を探る必要性が示された。

発表に対しては、公演の主催者について、また女性側からでなく国楽院のためのプロデュースなのか、またインドネシアにも類似した事例があるなどの質疑がなされた。一般に伝統芸能が公演として舞台化されることは、民族音楽学の扱う問題の一つであるが、韓国ゆえの国楽院の存在や農楽の特徴や、おそらく本発表の主眼であろう、韓国の歴史のコンテキストでの女性の置かれている意味がより明確に見えてくると、研究に深みが出るように思われた。 永原恵三

##### 韓国国立国楽院の伝統音楽普及と音楽教育の試みについて

山本華子

この発表はレジュメによれば、韓国国立国楽院が国楽(伝統音楽)の保存と継承を担う国家機関として、国家レベルでいかに支援体制を整えているか、を紹介するものであった。まず、国楽院の組織が説明され、国楽院の活動として掌楽課・舞台課による公演活動、国楽振興課による体験プログラムと教育プログラム、国楽研究室による博物館展示と教材作成・研究、さらに海外普及として在外韓国文化院への国楽講師派遣、視聴覚資料提供などが紹介された。

発表に対しては「国楽」の内容や教育の水準や子どもたちの反応などの質疑がなされた。また、情報提供だけでなく発表者独自の内容が必要ではないかという意見も出された。レジュメに記されているように、この研究は科研費による調査報告であったが、広報パンフレットの紹介と研究調査との相

違を、この発表からだけでは推察することができなかったのが、残念であった。ひととおりの国楽院の知識よりも、もし音楽教育に特化するならばより実践的な知見が提示された方が豊かな議論になったように思われた。 永原恵三

##### 江戸期舶来漢籍における七絃琴書について

鳥谷部輝彦

本発表は、江戸期に中国から舶来された音楽書、特に七絃琴書(琴譜集)についての調査報告であり、前半は、目録類(『尾張徳川家蔵書目録』、及び『舶載書目』等)から音楽に関する書目を抽出し、当時日本にどのような音楽書が輸入されていたのか、その一例を示した。後半は、現在内閣文庫が蔵する江戸幕府紅葉山文庫旧蔵琴書と佐伯藩主毛利高標旧蔵琴書数点(明・清代刊本)、国会図書館蔵明代琴譜一点、狩野文庫蔵明代琴譜の江戸期手写本一点を紹介し、各本の書誌を中国に現存する同本と比較することで、江戸期の集書には価値の高い琴書が見られると報告した。会場からは、研究の目的が問われたが、確かに、解明したい点を定めた上で、調査方法と範囲、対象を絞る必要があると思われた。とは言うものの、今回発表された内容には貴重な情報がいくつか見受けられ、琴楽受容史や日中学芸交流史における知見を提供するものとして、さらなる進展が期待される。 山寺美紀子

#### ◇研究発表3-A

【パネルディスカッション】

##### 近世前中期の儒学と楽思想

パネリスト代表:武内恵美子

パネリスト:榎木亨、遠藤徹、山寺美紀子

「礼楽」とは、社会秩序の基礎である礼節と人心の感化に関わる音楽とを合わせた概念で、儒学思想の中心的な位置を占めている。その内の「礼」に比して、「楽」は実際の演奏以外に抽象的・数理的内容を含み、意外に多方面の分野と関わるため、一般に必ずしも理解が容易ではない。本ディスカッションは、特に江戸時代前～中期に時代を絞って「楽」の思想の流れを考えようとするものである。このように時代を限定した理由について、パネリスト代表の武内恵美子氏は、江戸の思想史を見る上での鍵になる人物として荻生徂徠があり、仮にそこを一つの区切りとしてその前後を考えれば、楽思想を考える上で有効だと述べておられた。確かに後期から幕末となると雑多な要素が絡むため、これは礼楽に止まらず、儒学思想を考える上でも役立つ分けだと言えよう。

代表者の武内氏は、全体の趣旨説明に続いて、楽思想に取り組んだ最初の儒学者である熊沢蕃山の『雅楽解』『大学或問』等を探り上げ、それまでは直接論ずることが避けられていた楽の中心に雅楽を据えてその実践を説いた思想と、後代へ与

えた影響について論じた。続いて榎木亨氏は、南宋の蔡元定の大著『律呂新書』の日本に於ける研究の基礎を築いた朱子学者・中村惕斎について、その度量衡・音律・候気・雅楽等の諸元を検証しつつ、惕斎が朱子学者として目指した楽律研究の目的とその周辺について論じた。遠藤徹氏は、和算家であり医家でもある中根元圭の『律原發揮』をめぐって、明の張介賓の『類経附翼』と比較しつつ、度量衡・音律・雅楽・俗楽等に関する元圭の思想を明らかにした。山寺美紀子氏は本ディスカッションが対象とする時代の節目となる大家・荻生徂徠について、その『楽律考』『楽制篇』『琴学大意抄』の成立事情や内容の検証を軸に、徂徠の楽律論が後世へ与えた影響を論じた。

楽思想の研究には楽理・漢文・日本漢学・儒教思想・数学(特に和算)等多分野にわたる知見を活用する必要がある。その意味で、四人のパネリストはまさに適任であったと言える。本研究プロジェクトの更なる成果に期待したい。

小日向英俊

#### ◇研究発表3-B(司会:福岡正太)

##### トルコのクルド人における哀歌(Ağit)伝統の変容

——私的な追悼から集合的記憶のインデックスへ  
武田歩

本発表はトルコ、イラク、シリア、ドイツなどで離散状態にあるクルド人の伝統的世俗音楽の一つで、死者に手向ける哀歌(Ağit[トルコ語])の変容についての報告である。伝統的には親しい死者に捧げられ、多くの場合に女性が担う歌であったが、現在は実際に体験した苦しみ、事件、戦争、離別、愛の喪失について歌うもの、悲嘆の感情を歌うものとされるとの報告があり、3点の現代的「哀歌」の実例紹介があった。私的ジャンルとして歌われた伝統的「哀歌」が、民族の集合的喪失・離散経験の「嘆き」を表現する形式へと変容し、ディアスポラ・コミュニティにおける過去の集合的記憶の活性化を促し、聴き手の知識・経験の「インデックス」として作用すると発表者は言う。だが伝統様式と現代様式には音楽的連続性はない、との質問者への回答もあった。ならば現代の「哀歌」は伝統様式の変容ではなく、離散の結果に生じた新たなジャンルの創造と見ることはできないのか。

小日向英俊

##### イラクのシリア語系キリスト教徒共同体の音文化

——アッシリア人アイデンティティの形成と世俗音楽  
飯野りさ

中東マイノリティであるシリア語系キリスト教徒のアッシリア東方教会(他称はネストリウス派)の人々(2003年時点総人口約40万人?)の音文化を扱う報告である。現在、

彼らの半数以上が北米など英語圏在住で離散状態であると言う。その音楽には西洋音楽の影響が表れ、歌詞も英語のものがあると言う。また結婚披露宴などで伝承する集団舞踊、非中東的の歌謡曲も紹介された。呼称「アッシリアン」が様々なレベルで様々に使用されるため、解釈がたいへん複雑であることがQ&Aで回答された。アッシリア音楽を一つの統合体と見なし、その音文化を語ることは現在では困難な状態であるとの結論だった。自称「アッシリアン」が居住地によりどのような文脈で使用され、その音文化にはどのような多様性があるのかなのかなど、綿密な調査が必要であろう。全体としては、音楽についての発表時間があまりにも短かったことが悔やまれる。

小日向英俊

##### 新疆ウイグル自治区におけるクルグズ族の音楽と楽器の研究

——コムズを中心に

ウメトバエフ・カリマン

クルグズ共和国より古い様式が残っているのでは?と期待していたカリマン氏がウイグルで見たのは、ウイグル風の装飾を施した楽器、共和国よりもはるかに技巧的な手のパフォーマンスだったという。発表では両面コムズの演奏面を頻繁に入れ替え、手のあらゆる部位を使い、さらには演奏中に楽器を宙に放ったりする、面白くてかつ貴重なコムズ演奏の映像も披露され、思わず会場から拍手があがった。

発表者自身も認めるように調査はごく短期間で得られた情報や事例は少なく、ウイグルのコムズの実態について論じるのは現時点では無理である。両者の比較やウイグルにおける独自の展開についての論考も時期尚早と思われる。しかし限定的であっても希少な現地調査の成果を、学会発表によって研究者間で共有すること、そこからのフィードバックをさらなる研究の糧とすることには意義があると思う。今回の発表はおそらく研究の通過点だろう。今後の調査の進展と報告を期待する。

増野亜子

##### インドネシア・バリ島の古楽「スロンディン」の楽器編成に関する考察

野澤暁子

バリ東部の先住民族の村トゥンガナンに伝承されるスロンディンについて、その編成パターンと、対応するレパートリーという点から独自に分類・整理した論考であった。野澤氏が製作した、各編成のビデオを見ながらの分かりやすい解説であった。

質疑では主にこのビデオ撮影に用いられたレプリカをめぐって興味深いやりとりがなされた。レプリカ作成の経緯に関する質問に対し、野澤氏はスロンディンが本来、儀礼にのみ用いられる神聖な楽器とされ、タブーや制約を伴うこと、し

かし70年代に外国人研究者がレプリカ製作を依頼し、村の人々が合議の末これを許可したこと、そしてその後、トゥンガナン以外のバリ人のためのレプリカを含め、多様な用途のために楽器が複製された経緯についての解説があった。またこのレプリカを使用した村外音楽家の演奏活動に対する、トゥンガナンの人々の反応が「ほぼ無視」に近い状態だ、ということも興味深かった。

増野亜子

#### ◇研究発表4-A(司会:永原恵三)

##### 戦前・戦中期における柏木俊夫の音楽活動

——日記および自筆譜の検証をもとに

仲辻真帆

仲辻さんの発表は、戦前・戦中期における柏木俊夫(1912～1994)の音楽活動と創作理念について、日記と自筆譜の検証を通して考察するものだった。今回新出となる自筆史料(ご遺族が所蔵)の整理と調査により、柏木の活動の一端を明らかにしたことは大きな貢献と言える。まず、学生時代に綴られた日記から、彼の音楽経験や学生生活、交友関係の実態が示された。次に、独唱曲《中国歴朝 閨秀詩抄》(1944年作曲)の二種類の自筆譜に基づく楽曲研究から、「東洋的(日本的)な」表現法の試みとして、民謡音階や陽旋法、民謡的節回し、鐘の音の象徴的音型、日本語の高低アクセントへの配慮(これは標準語に準拠したと推察されるとのこと)等の事例が示された。質疑応答にあったように、柏木本人が「東洋的なもの」と「日本的なもの」の概念をあまり区別せずに捉えていたとすれば、その背景にある同時代の議論を踏まえた更なる考察が必要となるだろうが、それも含めて今後の研究の展開に期待したい。

井上登喜子

##### 記録映画『或る保姆の記録』における音について

望月愛

望月さんの発表は、保育所の日常生活を描いた記録映画『或る保姆の記録』(1942年公開、芸術映画社)における音に注目し、作品中の「現実音」の使用と機能について丹念に考察したものだった。まず、監督・演出家の水木荘也による「現実の真の姿」を捉える「スナップ主義」の撮影・演出方法が紹介され、次いで、音楽を担当した深井史郎の「現実音」に関する言説分析を踏まえながら、作品中に用いられた「現実音」について、現地録音の音楽とそれ以外の音楽(既成のレコード音楽も含む)の使用法が具体的に示された。最後に、「現実音」としての音楽は、映像内容を「事実」として伝える役割を担うとの見解が示された。今回の発表では、記録映画作品という「テキスト」の分析に主眼が置かれたが、一方で、こうした作品が戦時体制下に制作、公開されたという「コンテキスト」を視野に入れた考察もまた避けては通れないも

のであり、今後の課題のひとつとなろう。

井上登喜子

##### 地域の音楽文化の発信をめぐる

——熊本中央放送局の放送プログラムを対象に

三島わかかな

三島さんの発表は、戦前のラジオ放送における音や音楽の扱いに注目し、シリーズ番組「府県めぐり」(1939～40年、全44回)の検証を通して、地域の音楽文化の発信の問題に切り込むものであった。まず、ラジオ放送事業の展開を俯瞰した後、今回対象とする第三期「ネットワークの充実期」(1934～41年)の特徴(番組編成の全国一元化、中継網の広域化、現地収録の実現、聴取者の増加と多様化等)が確認された。番組制作における音の扱いについては、現地録音、録音音源の使用、スタジオでの生演奏の手法がとられ、使用された音素材は、地域の芸能や音楽、地域の風土や基幹産業を表す非楽音、朗読や講演による地域の歴史文化の紹介という三種類に分類されるとのことだ。こうした番組内容が聴取者に県民(地域)意識の形成と日本国内(県内)の多様性の認識をもたらしたであろうこと、音/音楽の表象の先駆的事例として、戦後との文化的連続性を示唆できることが指摘された。今後の様々な研究課題への拡がりを期待させる報告であった。

井上登喜子

#### ◇研究発表4-B(司会:久万田晋)

##### 音楽の文化的「進化」——「江差追分」の系統的分析

サベジ・パトリック

サベジ氏は、「進化」概念の有利性を示す事例研究として、1960年代の町田・竹内による《江差追分》の分析を取り上げ、彼らの定性的分析の成果である系統図・起源説と、自身の定量的分析の結果である唄の系統を比較し考察した。発表では、一つの共通先祖《碓氷峠馬子唄》から伝承されたとされる25曲を対象に、《江差追分》のうち馬子唄起源とされる本唄の第3フレーズを「旋律の同祖先性」法により分析し比較した。この方法は、遺伝子や言語のように音楽の配列のみに対象を絞る。つまり音源の細かい装飾音やリズムを無視し、音程比較だけを行い統計をとる。本唄の全7フレーズを分析すると、「追分曲族」に属するとされた24曲はフレーズの類似性に基づく系統図から二つのサブグループに分けられ、それは町田・竹内が示した「三下り系」と「馬子唄系」によく一致するとした。文化的進化における適応事例の一つとして、二つのサブグループの進化的選択は違っており、その歴史的説明がなされた。

ヒュー・デ・フェランティ

## 組踊の「声」の概念

——唱えと言語・ジェンダー・階級について  
マット・ギラン

ギラン氏の最近の研究主題は、主に沖縄の古典芸能における「声」の概念とその言語に基づく発現に関わる諸問題である。組踊の役者の発する声や発声法に関する用語は実質的な意味が能と大きく異なり、登場人物のジェンダーと階級により、分析上チュウジン(強吟)やワジン(和吟)に区別できる旋律や装飾音、発声法が用いられる。組踊に適切な声の作り方では、琉球古典音楽の演奏者は「声割り」(くいわい)という声の音質を狙い、声を鍛えることでそれを達成するという。「台詞回し」の抑揚や旋律、「声の技巧」の重要性を、実践者の発言や新聞記事等を引用して論じ、話し声と歌う声の中間に位置する唱えの「声の技巧」のジェンダー表出を考察した。能のコトバと同様に、組踊の唱えには男性と女性の区別が抑揚ではっきり現れるが、男性役の平板な唱えにも琉球土族社会内の位が声の技巧で表されていることを、金武良章の1991年の公演の音源を用いて示した。質疑応答では、世界の楽劇での男性/女性役を表す声の抑揚や旋律に統一性があるか、役者は口や喉・腹をどう使うのか、ある言語や芸能に相応しい発声法とその意識化が議論された。

ヒュー・デ・フェランティ

## ICTM (国際伝統音楽学会) に関するお知らせ

### 1. 「東アジア音楽研究会 (MEA)」 第4回国際シンポジウムの報告

ICTM 東アジア音楽研究会 (Study Group on Musics of East Asia、略称 MEA) の第4回国際シンポジウムが、奈良教育大学において8月21日~23日に開催された。発表者数60名、大会参加者数99名を数え、刺激的な議論が展開された。また今回の大会では二つの興味深いワークショップ/公演が催された。一つは仮面音楽劇の一種、伎楽に関するものだった。寺内直子氏により、明治期には失われたこの伝統の1960年代からの復興プロセス、および2000年代に入ってから新たな展開が説明され、天理大学雅楽部による上演がそれに続いた。韓国メディアによる取材もあり、韓国における伎楽への関心もうかがえた。もう一つのワークショップ/公演は、東アジアの楽器における絹弦の重要性についてであった。徳丸吉彦氏の企画によるこのワークショップ/公演では、演奏家、絹弦製造者、研究者がパネリストとして参加し、それぞれの立場から、合成繊維の弦にとってかわられつつある絹弦の価値について語った。どちらのワークショップ/公演も、研究と音楽・芸能の実践が非常に有意義な形で結び付けられていると感じた。

今大会では大会実行委員会の企画により、野生生物保全

NGO (Wildlife Conservation Society) のメンバーとしてコンゴ共和国で活動を行っている西原智昭氏の講演も行われた。氏は象牙のために乱獲され絶滅の危機に瀕している丸耳象の現状について紹介し、こうした事態を演奏家や楽器製造者が認識し、科学者との協力のもと象牙に代わる新しい素材を開発することの重要性を強調した。伝統的な素材や音へのこだわりと自然保護の立場が科学開発によって歩み寄る可能性を示唆する刺激的な講演だった。

アリソン時田氏による基調講演では、東アジアの国々の音楽文化が、中国からの影響、帝国主義・植民地化に伴う近代化という二つの共通性を持つものとして概観された。氏は、こうした共通性にも関わらず、東アジアの国々は西洋に対峙する形で自国のアイデンティティを形成し、お互いの音楽に耳を傾けていないと強調した。今回のシンポジウム全体を通じて、氏が強調した東アジアの音楽文化の密接な関係性が浮き彫りにされ、東アジアに焦点を当てたこの研究会の重要性が改めて確認された。

今大会では MEA の新理事の選挙結果も発表された。新たに選出されたのは、韓国の KIM Hee-sun (書記)、台湾の Tasaw Hsin-chun LU、中国の Huang WAN の三名(敬称略)、継続メンバーは、寺内直子(会長)、Helen REES (米国、副会長)、Matt GILLAN (日本)、LEE Chiug-huei (台湾) の三名(敬称略)で、この六名が2016年のシンポジウムまでの任期を務める。

次回の MEA 国際シンポジウムは2016年に台北国立芸術大学で開催される予定である。2006年に発足した MEA 十周年記念大会となる。

### 2. 第43回 ICTM 世界大会のお知らせ

場所: カザフ国立芸術大学 (カザフスタン、アスタナ)

日程: 2015年7月16日(木)~22日(水)

詳細は、ICTM のホームページ内“Events”の見出しのトップにある“2015 ICTM World Conference” (以下 URL) でご覧になれます。

<http://www.ictmusic.org/next-world-conference>

大会テーマ

1. Music and new political geographies in the Turkic speaking world and beyond
2. The creators of music and dance
3. Music, dance, the body, and society
4. Sound environments: From natural and urban spaces to personal listening
5. Visual representation of music culture
6. New Research



プログラム委員長は、現在ケンブリッジ大学の中央アジア音楽センターでディレクターを務める Razia SULTANOVA 氏です。ICTM の世界大会が中央アジアで開催されるのは初めてのことです。多くの会員のみなさまの参加を期待しています。

### 3. ICTM 研究会 (ICTM Study Groups) について

ICTM 内には、東アジア音楽研究会、音楽とマイノリティ研究会等、特定の研究領域・関心を共有する会員による数々の研究会が結成されています。各研究会は、定期的にシンポジウムを開催したり、研究成果を出版物として発表したりしています。各研究会の詳細については、ICTM ホームページの ICTM Study Groups の欄(※1)をご覧ください。また各研究会のシンポジウムについては、同ホームページ内、Events の欄の“Upcoming ICTM Events”(※2)をご覧ください。

※1 <http://www.ictmusic.org/study-groups-ictm>

※2 <http://www.ictmusic.org/events>

### 4. ICTM の入会申し込みについて

ICTM の世界大会や各研究会のシンポジウムで研究発表を行うには、ICTM 会員であることが条件になります。入会を希望される方は、下記ウェブサイトより入会申し込みができます(<http://www.ictmusic.org/membership/new>)。会費(年間60ユーロ)の納入には PayPal が利用できます。ご不明な点がありましたら、担当委員(早稲田みな子)までご連絡ください。

## 会員の受賞

本学会会員の藤井知昭氏は、瑞宝中綬章を受賞されました。

## 通常理事会・総会議決事項のお知らせ

2014年10月5日(日)に東京芸術大学において一般社団法人東洋音楽学会の第5回通常理事会が、2014年11月22日(土)に四天王寺大学羽曳野キャンパスにおいて第3回定時社員総会が開催されました。以下にこれらの会議における議決事項のうち、特記すべきものをお知らせします。なお、定時社員総会の議決の詳細については、後掲の第3回定時社員総会議事録(抄)ならびに添付書類をご参照ください。

#### 1) 新入会員について

理事会において、2014年4月以降に仮承認された正会員15名、学生会員1名が、会員として正式に承認されました。

#### 2) 法人改革に伴う諸規程変更について

一般社団法人への移行に伴い、諸規程の文言等の変更に

ついて検討し、「事務処理規則」「非常勤職員(定時勤務職員)就業規則」「学会関係者弔慰ガイドライン」を改訂承認しました。これで、社団法人時代の諸規程の改訂はすべて完了しました。

#### 3) 機関誌のウェブ公開について

機関誌『東洋音楽研究』に掲載された論文、研究ノートおよび書評について、74号(2009年発行)を2014年度に、以後、1年に1号ずつ発行から5年経ったものをJST(独立行政法人科学技術振興機構)の電子アーカイブで公開することが承認されました。

#### 4) 平成25年度公益目的支出計画実施報告書について

社団法人から一般社団法人への移行が完了するまで提出を義務づけられている公益目的支出計画実施報告書について、平成25年度の報告書の内容について承認されました。

## 臨時理事会議決事項のお知らせ

去る11月23日(日)四天王寺大学藤井寺駅前キャンパス401教室において、臨時理事会が行われ、理事の役割分担、支部委員、各種委員、参事が以下のように決まりましたので、お知らせいたします。

#### 1) 理事

[会長] 塚原康子

[副会長] 永原恵三(兼総務・広報)

[東日本支部長] 尾高暁子

[西日本支部長] 福岡正太(兼機関誌)

[沖縄支部長] 久万田晋

[総務] 遠藤徹、小日向英俊(情報委員会担当)、竹内有一(田邊賞担当・兼西日本支部担当)、永原恵三(兼副会長・広報)、増野亜子(兼広報)、藤田隆則(兼機関誌・西日本支部担当)

[経理] 植村幸生、高松晃子

[広報] 永原恵三(兼副会長・総務)、増野亜子(兼総務)

[機関誌] 田中多佳子(兼西日本支部担当)、福岡正太(兼西日本支部長)、藤田隆則(兼総務・西日本支部担当)、横井雅子

[東日本支部担当] 澤田篤子

[西日本支部担当] 竹内有一(兼総務)、田中多佳子(兼機関誌)、藤田隆則(兼総務・機関誌)

[常務理事] 植村幸生、遠藤徹、小日向英俊、高松晃子、竹内有一

#### 2) 支部委員

[東日本] 井上貴子、奥山けい子、ギラン・マツト、近藤静乃、濱崎友絵、伏木香織、中村美奈子、

福田裕美、前島美保、前原恵美、丸山洋司  
〔西日本〕 明木茂夫、上野暁子、上野正章、仲万美子、  
出口実紀、劉麟玉  
〔沖縄〕 高瀬澄子、三島わかかな、岡田恵美

### 3) 各種委員

各種委員会 (〇は委員長)

〔会報編集委員会〕 井上登喜子、大久保真利子、角優希、  
〇永原恵三、増野亜子、松本民菜、  
安原道子、渡辺佐恵子

〔機関誌編集委員会〕 武内恵美子、田中多佳子、福岡正太、  
〇藤田隆則、横井雅子

〔情報委員会〕 小尾淳、〇小日向英俊、塚原健太、  
テレンス・ランカシャー、時田アリソン

〔ICTM 担当〕 早稲田みな子

〔芸関連担当〕 塚原康子

### 4) 参事

〔総務〕 五十嵐美香、太田郁、櫻井陽、佐藤文香、  
ツェルゲル、仲辻真帆、比嘉舞、山下暁子、  
山本美季子

〔広報〕 大久保真利子、角優希、松本民菜、安原道子、  
渡辺佐恵子

〔東日本支部〕 安納真理子、江口麗華、ウメトシエワ・カリマン、  
鯨井正子、酒井絵美、佐竹悦子、木岡史明、  
田村にしき、宮内基弥、安原道子、萩谷沙耶佳、  
村上佳寿子

〔西日本支部〕 伊藤悟、井上春緒、梶丸岳、榎木亨、竹内直、  
辻本香子

〔沖縄支部〕 杉山昌子、玉城幸

## 会費納入のお願いと大学院生会費割引のお知らせ

### 1. 会費納入のお願い

2014年9月から新しい年度が始まりました。会費未納の方は、金額をお確かめの上お払くださいますよう、お願い申し上げます。振り込み用紙を紛失された場合は、下記学会口座宛にお振ください。なお、本会報と入れ違いに納入された場合はどうぞご容赦ください。

正会員：8000円

学生会員(大学院生を除く)、および割引申請者：6000円

### 〇郵便局からの払込

ゆうちょ銀行 [口座番号] 00160-6-55723

[加入者名] 一般社団法人東洋音楽学会

### 〇他金融機関からの振込

ゆうちょ銀行 [支店名] 〇一九(ゼロイチキュー)店 (019)  
[当座] 0055723

### 2. 会費割引制度のお知らせ

本学会には、夫婦・親子割引、大学院生・研究生割引の制度があります。それぞれ条件や申込方法が異なります。学会のホームページ (<http://tog.a.la9.jp/about.html#7>) でご確認の上、お申し込みください。

### 3. 会費の滞納者へのご注意

滞納がありますと、会員の権利(研究会・大会での発表、学会の発行物の受取)が行使できないことがありますのでご注意ください。

### 4. 卒論・修論の発表者へのご注意

発表を機に入会された会員にも、新年度の会費納入義務が発生いたします。退会するためには退会届が必要です。その旨ご了解のうえ、会費の納入にご協力ください。

## 第32回田邊尚雄賞アンケートのお願い

第32回田邊尚雄賞選考委員会では、同賞の選考にあたり、推薦情報を募集しています。会員の業績を顕彰する貴重な機会ですので、皆さまからの積極的なアンケート送付をお願いいたします。自薦他薦は問いません。

**選考対象:** 2014(平成26)年1月1日~12月31日の発行物。

**アンケート締切:** 2015(平成27)年2月6日(金) 正午

**記入事項:** 著者名、発行年月日、発行所名。なお、論文の場合は、以上のほか、掲載誌名、巻次、編集者名、論文頁数も記してください。

**送り先:** 東洋音楽学会第32回田邊尚雄賞選考委員会

(郵送) 〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3  
三春ビル307号

(FAX) 03-3832-5152

(電子メール) [LEN03210@nifty.com](mailto:LEN03210@nifty.com)

**選考委員:** 金城厚(委員長)、加納マリ、福岡まどか、  
三浦裕子、横井雅子

## 東日本支部からのお知らせ

◇定例研究会発表募集(7月例会)

2015年7月4日(土)に開催される東日本支部定例研究会での研究発表を募集しています。

発表を希望される方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、

連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記の上、4月20日までに、東日本支部事務局あて、お申し込みください。

なお、発表希望をご提出後1週間経過しても事務局からの連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

#### ◇「会員の声」投稿募集

東日本支部発行『東日本支部だより』には、会員の皆様からの情報を掲載する「会員の声」欄を設けています。研究会、講演会、展示会など、会員の活動に関連する情報がありましたら、東日本支部事務局あて、お知らせください。投稿方法などの詳細は、『東日本支部だより』の最終ページをご覧ください。

[東日本支部事務局]

〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル307号  
東洋音楽学会東日本支部事務局

E-mail : tog.higashi@gmail.com

## 第11回日中音楽比較研究国際学術会議のお知らせ

標記の学術会議は、日中間の音楽学者の相互交流と対話を目的に、1995年以来、隔年で開催されています。第11回となる今回は、新疆ウイグル自治区ウルムチ市にある新疆芸術学院が主催校となって開催されます。東西交流の拠点である新疆は音楽文化の宝庫です。会員の皆様の積極的なご参加をお待ちしております。

日程：2015年9月7日～10日(7～8日：研究発表、9～10日：トルファン地方エクスカージョンの予定)

会場：新疆芸術学院(新疆省烏魯木齊(ウルムチ)市団結路734号)

#### ◇募集する発表テーマ

- 1) 日中両国の伝統音楽・芸能に関する比較研究
- 2) 日中両国の音楽教育に関する比較研究
- 3) 日中両国の近現代音楽史に関する比較研究
- 4) シルクロードの音楽・舞踊文化、音楽の東西交流
- 5) イスラーム音楽文化研究
- 6) ムカーム音楽に関する比較研究

#### ◇発表要旨および本文の提出

- 1) 発表要旨提出期限：2015年3月15日

日本語(800字程度)中国語(600字程度)どちらかを選択。電子メールのみ受け付けます。題目、要旨、氏名、性別、

所属(職名)、連絡先(住所、電話、電子メールアドレス)を明記してください。審査ののち発表者を決定し、発表者には正式の招待状をお送りいたします。

- 2) 本文提出期限：2015年6月15日

日本語(5000字以内)中国語(4000字以内)の両方を提出してください。電子メールのみ受け付けます。

◇日本側参加者の連絡・お問い合わせ先(要旨送付先を兼ねる)：  
uemura\_y@ms.geidai.ac.jp(東京藝術大学・植村幸生)

## 会員異動

会員異動は個人情報保護のため削除しました。

会員異動は個人情報保護のため削除しました。

はがき、またはファクス、E-mail等でも結構です)

◆改姓・改名のお届けには、ご希望の表記法をお書き添えください。(複数表記される場合、どちらを主な表記にするのか等)

◆事務局に登録はされても、公表を希望されない情報等がある場合には、その旨ご明記ください。

## 図書・資料等の受贈

(2014年9月～12月、到着順)

- 『楽道』9,10,11,12月号 (公財) 正派邦楽会  
『雅楽だより』第39号 雅楽協議会  
『日本音楽学会会報』第92号 日本音楽学会  
『音楽学』第60巻1号 日本音楽学会  
『性を超越るダンサー ディディ・ニニ・トウォ』(DVD付)  
福岡まどか著 古屋均写真 めこん  
『ポピュラー音楽から問う—日本文化再考』  
東谷護編著 せりか書房  
『川崎九淵著作集・上』(CD付) 岡田万里子編 花もよ  
『川崎九淵著作集・下』(CD付) 岡田万里子編 花もよ  
『太鼓方川崎九淵素描』(CD付) 西澤建義著 花もよ  
『民俗芸能研究』第57号 民俗芸能学会

会員異動は個人情報保護のため削除しました。

## 新刊書籍

(ゴシック体の項目は賛助会員による刊行物)

- 『遊ぶ』ロシア—帝政末期の余暇と商業文化』  
ルイズ・マクレイノルズ、法政大学出版局、7,344円  
『愛国とレコード—幻の大名古屋軍歌とアサヒ蓄音器商会』  
辻田真佐憲、えにし書房、1,728円  
『新たな系譜学をもとめて—アート・身体・パフォーマンス』  
東京都現代美術館、フィルムアート社、3,240円  
『イージー・トゥ・リメンバー—アメリカン・ポピュラー・ソング  
の黄金時代』 ウィリアム・ジンサー、国書刊行会、3,456円  
『うたのチカラ—JASRACリアルカウントと日本の音楽の未  
来』 反畑誠一監修、集英社、2,160円  
『ウイグル十二ムカーム—シルクロードにこだまする愛の歌』  
萩田麗子、集広舎、2,160円  
『江戸端唄集』 倉田喜弘編、岩波文庫、778円  
『大阪万博が演出した未来—前衛芸術の想像力とその時代』  
暮沢剛巳、江藤光紀、青弓社、2,160円

◆住所・所属等に変更ありましたら事務局までご連絡  
ください。(機関誌別冊会員名簿とじ込みの変更届用

『新版 音楽の科学——音楽の物理学、精神物理学入門』

ホアン・G. ローダラー、音楽之友社、4,860円

『音感覚論』

ヘルマン・フォン・ヘルムホルツ、銀河書籍、3,218円

『音楽・芸能賞事典〈2007-2013〉』

日外アソシエーツ編、日外アソシエーツ、19,980円

『小澤征爾 覇者の法則』

中野雄、文春新書、864円

『オール・アバウト・チェンバー・ロック&アヴァンギャルド・ミュージック——Rock In Opposition とその周辺』

マーキー・インコーポレイティド、3,240円

『オペラのメディア——近代ヨーロッパのミソジニー』

梅野りんこ、水声社、4,860円

『歌謡の仕組み——その体系と学び方』

リチャード・ミラー、音楽之友社、5,832円

『歌謡曲が聴こえる』

片岡義男、新潮新書、820円

『歌舞伎の化粧』

長谷一美編著、雄山閣、3,240円

『歌曲(リート)と絵画で学ぶドイツ文化史——中世・ルネサンスから現代まで』

石多正男、慶応義塾大学出版会、2,916円

『カラー百科 写真と古図で見る狂言七十番』

田口和夫編、勉誠出版、3,456円

『身体は』

渡辺保、幻戯書房、2,592円

『雅楽の奈良を歩く』

笠置侃一、包、2,700円

『菊之助の礼儀』

長谷部浩、新潮社、1,620円

『狂言深井志道軒——トントン、とんだ江戸の講釈師』

斎田作楽、平凡社、3,024円

『九代目松本幸四郎』

中村義裕、三月書房、2,700円

『クレオール・ニッポン——うたの記憶を旅する』

松田美緒、アルテスパブリッシング、3,780円

『古典派の音楽——歴史的背景と演奏習慣』

アントニー・バートン編、音楽之友社、3,240円

『国境を越えて愛されたうた——「上を向いて歩こう」から「アメージング・グレース」まで』

竹村淳、彩流社、2,052円

『古都のオーケストラ、世界へ!——「オーケストラ・アンサンブル金沢」がひらく地方文化の未来』

潮博恵、アルテスパブリッシング、1,728円

『ザ・ビートルズ 解散の真実』

ピーター・ドゲット、イースト・プレス、3,780円

『柴田南雄著作集〈1〉』

柴田南雄、国書刊行会、7,344円

『湿地の博物誌』

高田雅之責任編集・著、北海道大学出版会、3,672円

『島唄を歩く〈2〉』

小浜司、琉球新報社、1,620円

『ジャコ・パストリアス——エレクトリック・ベースの神様が遺してくれたもの』

松下佳男、DU BOOKS、2,160円

『ジョン・コルトレーン「至上の愛」の真実——スピリチュアルな音楽の創作過程(新装改訂版)』

アシュリー・カーン、DU BOOKS、3,888円

『スクリヤーピン——晩年に明かされた創作秘話』

レオニード・サバネーエフ、音楽之友社、3,888円

『すみれ達の証言——大正・昭和を駆け抜けたタカラジェンヌたち』

榎谷多紀子、中央公論事業出版、1,296円

『世界の音楽大図鑑』

ロバート・ジグラー、スミノエ協編、河出書房新社、15,984円

『西洋近代の都市と芸術(8) ロンドン——アートとテクノロジー』

山口恵里子、竹林舎、16,200円

『大陸からの音——クラシック音楽の中継地・満洲』

増田芳雄、近代文藝社新書、1,080円

『チャイコフスキーの音符たち——池辺晋一郎の「新チャイコフスキー考」』

池辺晋一郎、音楽之友社、2,376円

『津軽 いのちの唄』

坂口昌明、ふなうま舎、3,456円

『ドファララ門』

山下洋輔、晶文社、2,160円

『流しの仕事術』

パリなかやま、代官山ブックス、1,296円

『日本メディアアート史』

馬定延、アルテスパブリッシング、3,024円

『日本の民俗 祭りと芸能』

芳賀日出男、角川ソフィア文庫、1,382円

『人間、やっぱり情でんなあ』

竹本住大夫、文藝春秋、1,836円

『日本の20世紀芸術』

東京美術倶楽部編、平凡社、28,080円

『能のうた——能楽師が読み解く遊楽の物語』

鈴木啓吾、新典社選書、3,456円

『花と幽玄の覚書』

石橋少子、本阿弥書店、3,240円

『人はなぜ歌うのか』

丸山圭三郎、岩波現代文庫、1,058円

『ひたすらないのち』

高田三郎、河合楽器製作所・出版部、3,024円

『「ビートルズ!」をつくった男——レコード・ビジネスへ愛をこめて』

高島弘之、DU BOOKS、1,814円

『ビジネスマンへの歌舞伎案内』

成毛眞、NHK 出版新書、799円

『ビートルズ・ストーリー64——POP GO THE BEATLES』

藤本国彦責任編集、ファミマ・ドット・コム、1,296円

『不滅の遠藤美』

橋本五郎ほか、藤原書店、3,024円

『ブラジル・インストルメンタル・ミュージック・ディスクガイド——ショーロ、ボサノヴァからサンバ・ジャズ、コンテンポラリーまで』

ウィリー・ラウパー監修、DU BOOKS、2,484円

『文楽手帖』

高木秀樹、角川ソフィア文庫、864円

『ブルーノート・レコード——妥協なき表現の軌跡』

リチャード・ヘイヴァーズ、ヤマハミュージックメディア、8,424円

『プログレッシヴ・ジャズ——進化するソウル フライニング・ロータスとジャズの現在』

日版アイ・ピー・エス、1,836円

- 『別冊太陽 アイヌの世界を旅する』  
北原次郎太、平凡社、1,296円
- 『望郷とところざしの「ああ上野駅」』  
山岸治男、近代文芸社新書、1,080円
- 『ポップ・アフリカ800 アフリカン・ミュージック・ディスク・ガイド』  
萩原和也、アルテスナブリッシング、3,024円
- 『ポピュラー音楽から問う——日本文化再考』  
東谷護編著、せりか出版、3,240円
- 『まるごと尺八の本』  
葛山玄海、青弓社、1,728円
- 『舞をどり』  
梅津貴和、淡交社、3,024円
- 『南九州における神楽面の系譜——王面から神楽面への展開』  
泉房子、鉦肌社、8,640円
- 『みたい! しりたい! しらべたい! 日本の祭り大図鑑(1) 病やわざわいをはらう祭り』  
松尾恒一監修・著、ミネルヴァ書房、3,024円
- 『山田耕筰——作るのではなく生む』  
後藤暢子、ミネルヴァ書房、4,104円
- 『ユダヤ人とクラシック音楽』 本間ひろむ、光文社新書、820円
- 『ゆふいん音楽祭35年の夏』 渡辺和、木星舎、2,916円
- 『謡曲百五十番を歩く』 清水昭次郎、ほおずき書籍、3,780円
- 『四代目鴈治郎への軌跡』  
楓大介、マリアパブリケーションズ、4,644円
- 『「ライブ・イン・ジャパン」コレクション 1966-1993』  
鈴木道子編、河出書房新社、3,132円
- 『ワイルド・ロックンロール・ディスク・ガイド50's & 60's』  
ジミー益子、グラフィック社、2,376円

## 新発売視聴覚資料

(ゴシック体の項目は賛助会員による刊行物)

### ●CD

- 『生田流箏曲/岡村愛 (第15回邦楽技能者オーディション合格者)』  
VZCF-1033、3,240円
- 『置賜の民謡』  
COCJ-38835、1,700円
- 『雅楽の世界(上)』  
COCJ-38887-8、4,536円
- 『雅楽の世界(下)』  
COCJ-38889-80、4,536円
- 『絹のおと The Beautiful Sounds of Silk Strings』  
COCJ-38723、2,160円
- 『吟——嘉手苅林昌の世界 その4』  
COCJ-38631、2,484円
- 『くるくる節/下関漁港節』  
VZCG-10558、1,296円
- 『虚無僧尺八——伝承の軌跡』  
VZCG-8555~8559、19,440円
- 『恋——十九の春 島々のうた 第2集』  
COCJ-38632、2,484円
- 『所傳 三谷清覧——三橋貴風 明暗/根笹/琴古 尺八古典本曲の世界』  
COCJ-38852-4、6,264円
- 『相馬民謡の世界』  
COCJ-38752、2,268円
- 『東北民謡のうたごえ』  
COCJ-38753、2,160円

- 『中島勝祐創作賞(第三回)「花の寺」』  
VZCG-796、3,240円
- 『日本コロムビア吟詠音楽会創立50周年 初心——青少年育成と共々』  
COCJ-38719、2,300円
- 『撥——島々の唄 第4集』  
COCJ-38634、2,484円

### ●DVD

- 『第十八回日本伝統文化振興財団賞 山村友五郎(上方舞)』  
VZBG-50、3,780円
- 『映像で楽しめる「こっぼんの民謡」』  
COBA-6720-4、12,960円

### ●カセット

- 『大漁唄い込み/秋田舟方節(ソーラン節入り)』  
VZSG-10630、1,296円
- 『磯節——大洗甚句入り/岡崎五万石おどり』  
VZSG-10628、1,296円

## 編集後記

今号では第65回大会の報告を中心として記事を掲載しております。今大会は四天王寺大学を開催校として、四天王寺大学恩頼堂文庫の展覧をはじめとして、公開講演会では四天王寺の聖霊会についての講演、ラウンドテーブル、公演をしていただきました。また研究発表も多くの参加者に恵まれ活発な議論が交わされましたが、本誌でその雰囲気の一部でもお伝えできれば幸いです。

なお、ご講演を賜る予定であった、本学会参与をお務めいただいた小野功龍先生が急逝なさいました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

また、このたび役員が交代し、会報編集委員も理事をはじめとして参事の方々も一部入れ替わりました。東洋音楽学会内の情報提供のみならず、関連学会、国際学会など、学術情報の提供の場として、一層の充実を図ってまいります。お気づきの点などがございましたら、お知らせ下さいますよう、お願いいたします。(永原恵三)

会報編集委員会

理事：永原恵三、増野亜子

委員：井上登喜子

参事：大久保真利子、角優希、松本民菜、安原道子、  
渡辺佐恵子

### 第3回定時社員総会議事録(抄)・添付書類

1. 日時:平成26年11月22日(土)16:40~17:50
2. 場所:四天王寺大学羽曳野キャンパス大講堂
3. 出席者:367名(出席43名、委任状提出172名、  
書面議決152名)

〔備考〕正会員614名、定足数307名

#### 4. 議事事項と審議の経過及び結果

定款第19条により薦田治子会長が議長となり、定足数を確認の上、開会を宣言した。次いで定款施行細則第16条により副議長を要請し、大谷紀美子、加納マリ両氏が選出された後、以下の議事を開始した。

#### 第1号議案 役員選任の件

澤田篤子選挙管理委員長が欠席のため小日向英俊副委員長より「役員選出資料」【添付書類1】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

#### 第2号議案 平成25(2013)年度事業報告の件

小塩さとみ理事(総務担当)より「平成25(2013)年度事業報告」【添付書類2】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

#### 第3号議案 平成25(2013)年度収支決算の件

早稲田みな子理事(経理担当)より「平成25(2013)年度収支計算書内訳表」【添付書類3】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

#### 第4号議案 平成26(2014)年8月31日現在貸借対照表および正味財産増減計算書の件

早稲田みな子理事により「貸借対照表内訳表」【添付書類4-1】、「貸借対照表」【添付書類4-2】、「正味財産増減計算書」【添付書類4-3】、「正味財産増減計算書内訳表」【添付書類4-4】、「附属明細書」【添付書類4-5】について説明があった。続いて、徳丸吉彦監事により「監査報告書」【添付書類8】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

#### 第5号議案 2014年8月31日現在会員異動状況の件

小塩さとみ理事より「会員の異動状況(2013年.9.1~2014年.8.31)」【添付書類5】について説明があった。議長

がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

#### 第6号議案 その他

議長が議場に対して発議を促したが、その他の議案は出されなかった。

その後、小塩さとみ理事(総務担当)が「平成26(2014)年度事業計画」【添付資料6】について、早稲田みな子理事(経理担当)が「平成26(2014)年度収支予算書」【添付資料7】についてそれぞれ報告を行った。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。



総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

[第3回定時社員総会 添付書類2-1]

**平成25年度(2013年度)事業報告**

(自平成25年(2013年)9月1日 至平成26年(2014年)9月31日)

[1] 研究発表会および学術講演会の開催(定款第5条1)

(1) 公開講演会の実施(定款施行細則第3条1)

- ・日時 2013年11月9日
- ・会場 静岡文化芸術大学
- ・課題1 「楽器博物館が担う「国際」と「学際」
- 課題2 「浜松周辺の邦楽文化—浜松まつり他について」
- 課題3 「浜松市無形民俗文化財 遠州大念仏」

(2) 研究発表大会の実施(定款施行細則第3条2)

- ・日時 2013年11月10日
- ・会場 静岡文化芸術大学
- ・発表件数 23件  
(共同発表、パネルディスカッション、レクチャー・パフォーマンスを含む)

(3) 次年度大会の準備

- ・日時 2014年11月22日、23日
- ・会場 四天王寺大学

(4) 定例研究会(定款施行細則第3条3)

○東日本支部

- ・回数 7回(第74回~第80回 12・2・3・4・5・6・7月)
- ・会場 東京芸術大学ほか
- ・内容 研究発表、特別講演、卒業論文・修士論文・博士論文発表ほか

○西日本支部

- ・回数 4回(第262回~第265回 2・5・6・7月)
- ・会場 京都教育大学ほか
- ・内容 研究発表、記念講演、修士論文・博士論文発表ほか

○沖縄支部

- ・回数 1回(第61回 2月)
- ・会場 沖縄県立芸術大学
- ・内容 研究発表

[2] 学会誌および学術図書の刊行(定款第5条2)

(5) 機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款施行細則第3条4)

○第79号の編集、刊行(2014年8月31日発行)

- ・内容 会員の論文、研究ノート、資料紹介、書評ほか

○『東洋音楽学会会報』

- ・第89号(2013年9月)、第90号(2014年1月)、第91号(2014年5月)
- ・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、図書・視聴覚資料紹介、会員消息

○『東日本支部だより』

・第33号(2013年11月)、第34号(2014年3月)、第35号(2014年6月)

・内容 東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声ほか

○『西日本支部だより』

・第76号(2013年9月)、第77号(2014年4月)、第78号(2014年5月)

・内容 西日本支部定例研究会の開催案内・報告、支部会員への諸通知ほか

○『沖縄支部通信』

・第35号(前年度2013年7月に支部会員にのみ配布したものを全会員に発送。)

・内容 沖縄支部定例研究会の開催案内・報告

[3] 関連学協会との連絡および協力(定款第5条3)

(7) 日本学術会議への協力

○日本学術会議協力学術研究団体として協力

(8) 音楽文献目録委員会への参加

○会員三名を委員として派遣

(9) 国際伝統音楽学会(ICTM)への協力

○日本国内委員会として加盟

(10) 芸術学関連学会連合への参加

○会員一名を委員として派遣

[4] 研究の奨励および研究業績の表彰(定款第5条4)

(11) 「田邊尚雄賞」(定款施行細則第3条5)

○第30回田邊尚雄賞の授賞

・日時 2013年11月9日

・受賞者および授賞対象

三島暁子『天皇・将軍・地下楽人の室町音楽史』(思文閣出版、2012年2月発行)

山寺美紀子『国宝『碓石調幽蘭第五』の研究』(北海道大学出版会、2012年2月発行)

○第31回田邊尚雄賞の選考と発表

・受賞者および授賞対象

梶丸岳『山歌の民族誌—歌で詞藻を交わす』(京都大学学術出版会、2013年3月発行)

[5] 研究および調査(定款第5条5)

(12) 国内または国外における学術調査および研究

とくになし

[6] その他目的を達成するために必要な事項(定款第5条6)

(13) 東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供

(14) 独立行政法人科学技術振興機構(JST)電子アーカイブ事業への参加

(15) 一般社団法人へ移行後の諸制度の整備(規程類の改訂等)

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。



総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

[第3回定時社員総会 添付書類6]

**平成26年度(2014年度)事業計画**

(自平成26年(2014年)9月1日至平成27年(2015年)8月31日)

[1] 研究発表会および学術講演会の開催(定款第5条1)

(1) 公開講演会の実施(定款施行細則第3条1)

- ・日時 平成26年11月22日(土)・23日(日)
- ・会場 四天王寺大学

[第1日] 羽曳野キャンパス

[第2日] 藤井寺駅前キャンパス

- ・課題1 「四天王寺の聖霊会について」  
講演者: 小野功龍氏(相愛大学名誉教授)

・ラウンドテーブル

司会進行: 小野真氏(相愛大学准教授)

四天王寺聖霊会の声明について 近藤静乃(東京芸術大学非常勤講師)

声明の実践者として 南谷恵敬氏(四天王寺執事・法部部长、四天王寺大学客員教授)

付物・附楽の演奏者として 小野功龍氏

- ・課題2 「四天王寺聖霊会の声明」声明の実演、付物・附楽その他楽の演奏、映像による聖霊会の紹介 進行: 南谷美保(四天王寺大学教授)

(2) 研究発表大会の実施(定款施行細則第3条2)

- ・日時 2014年11月23日
- ・会場 四天王寺大学 藤井寺駅前キャンパス
- ・発表件数 未定

(3) 次年度大会の準備

- ・日時 2015年10月または11月(予定)
- ・会場 東京芸術大学

(4) 定例研究会(定款施行細則第3条3)

○東日本支部

- ・回数 6回(第81回~第86回 12・2・3・4・6・7月)
- ・会場 東京芸術大学ほか
- ・内容 研究発表、卒業論文・修士論文・博士論文発表ほか

○西日本支部

- ・回数 4回(第266回~第269回 12・2・5・7月)
- ・会場 国立民族学博物館ほか
- ・内容 研究発表、修士論文・博士論文発表ほか

○沖縄支部

- ・回数 3回(第63回~第65回 1・5・7月)
- ・会場 沖縄県立芸術大学
- ・内容 修論発表ほか

[2] 学会誌および学術図書(定款第5条2)

(5) 機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款第5条2)

○第80号の編集・刊行

- ・内容 会員の論文、研究ノート、研究動向、書評・視聴覚

資料評・書籍紹介・視聴覚資料紹介ほか

(6) 会報の刊行

○『東洋音楽学会会報』

- ・第92号(2014年9月)、第93号(2015年1月)、第94号(2015年5月)

・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、図書・視聴覚資料紹介、会員消息

○『東日本支部だより』

- ・第36号(2014年11月)、第37号(2015年3月)、第38号(2015年6月)

・内容 東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声ほか

○『西日本支部だより』

- 第78号(2014年9月)、第79号(2015年1月)、第80号(2015年4月)

内容 西日本支部定例研究会の開催案内・報告、支部会員への諸通知ほか

○『沖縄支部通信』

- ・第36号(2014年11月)

・内容 定例研究会報告

[3] 関連学協会との連絡および協力(定款第5条3)

(7) 日本学術会議への協力

○日本学術会議協力学術研究団体として協力

(8) 音楽文献目録委員会への参加

○会員三名を委員として派遣

(9) 国際伝統音楽学会(ICTM)への協力

○日本国内委員会として加盟

(10) 芸術学関連学会連合への参加

○会員一名を委員として派遣

[4] 研究の奨励および研究業績の表彰(定款第5条4)

(11) 「田邊尚雄賞」

○第31回田邊尚雄賞の授賞

・日時 2014年11月22日

・受賞者および授賞対象

梶丸 岳『山歌の民族誌——歌で詞藻を交わす』

2013年3月31日発行、京都: 京都大学学術出版会、ISBN978-4876982707

○第32回田邊尚雄賞の選考と発表(2015年4月予定)

[5] 研究および調査(定款第5条5)

(12) 国内または国外における学術調査および研究

とくになし

[6] その他目的を達成するために必要な事項(定款第5条6)

(13) 東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供

(14) 独立行政法人科学技術振興機構(JST)電子アーカイブ事業への参加

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

[第3回定時社員総会 添付書類8]

## 監査報告書

一般社団法人 東洋音楽学会

会長 薦田 治子 殿

平成26年9月24日

(2014年)

監事 折内道敬 

監事 徳丸吉彦 

私たちは、平成25年9月1日から平成26年8月31日までの平成25年度における会計及び業務の監査を行い、次のとおり報告する。

### 1. 監査の方法の概要

- (1) 会計監査について、会計帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて財務諸表等の正確性を検討した。
- (2) 業務監査について、理事会及びその他の会議に出席し、関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて業務執行の妥当性を検討した。

### 2. 監査意見

- (1) 平成25年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、正味財産増減計算書及び財産目録並びに収支計算書は会計帳簿の記載金額と一致し、法人の財産状態及び収支状況を正しく表示していると認める。
- (2) 事業報告書の内容は真実であると認める。
- (3) 公益目的支出計画実施報告書に関して監査を行った結果、正しく実施されていることを認める。
- (4) 理事の職務執行に関する不正の行為又は法令もしくは定款に違反する重大な事項はないと認める。

以上